



Title	大学生の教養教育科目の選択基準と満足度
Author(s)	松下, 戦具; 赤井, 誠生
Citation	大阪大学大学教育実践センター紀要. 2010, 6, p. 1-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8226
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学生の教養教育科目の選択基準と満足度

松下 戦具・赤井 誠生

Selection Standards and Satisfaction for the Electives in University Students

Soyogu MATSUSHITA and Seiki AKAI

Although the decision with regard to the choice of electives in general education courses is an important one for university students, there have been few studies that have discussed the decision criteria involved in such cases. To investigate students' tendencies when faced with such choices, we first enumerated seven decision criteria and then, using the paired comparison method, quantified the emphasis that was placed on them by the new students at Osaka university ($n = 136$). Our findings illustrated that criteria such as "interesting" and "easy to get a course credit" tend to wield more influence on students than "good teacher" and "to fill the blanks in the schedule". Next, we analyzed the correlation between such magnitudes of emphasis and students' satisfaction with their electives at large, and revealed that the criterion "interesting" has a positive correlation with satisfaction ($r = .20$). We were thus able to point to the importance of students' interest in favor of an elective while making their choices and discussed the point in the context of faculty development.

はじめに

普通、大学生は年度始めや学期始めに、自分が履修する授業を選択して登録しなければならない。このとき学生たちは、各自の利益を多くし、不利益を低減するように行動していると考えられる。つまり履修登録は選択行動といえるのだが、その選択には様々な要因や選択基準が関連している (Gnoth & Juric, 1996; 上田, 1997)。たとえば、興味のある分野かどうか、楽に単位を取得できるかどうか、将来役に立つ内容かどうかなどである。学生はこれらの要因を総合的に考慮し、各自がより満足のゆく授業を選択しているはずである。

学生たちはそれぞれの判断により授業を選択するが、受講した授業に対して必ずしも満足するわけではない。たとえば、友達に誘われて同じ授業を受講しても、自分の興味にそぐわずつまらない思いをするかもしれない。また、たとえ自分の興味のある分野の授業を選択しても、教員の方針と合わずに授業への意欲が失われるかもしれない。つまり授業の選択いかんによって、学生の授業への満足度は左右されうると考えられる。それゆえ、授業選択行動は学生にとって重要な行動といえる。

このような観点は、たとえば教養教育科目¹⁾などで

重要になろう。教養教育科目は一般的に入学後間もない1年生から履修することになるが、彼らにとって大学の授業を選択することは初めての経験である。入学早々に不適切な基準で授業を選択すると、多くの時間を台無しにしてしまう可能性がある。またこれらの科目は選択肢が多く、それだけに選択の持つ意味が大きくなる。さらに大学における教養教育は近年ますますその重要性を増してきていることを考えれば(たとえば、文部科学省中央教育審議会, 2008)、大学側は学生が適切な基準で授業科目を選択できるよう促すべきである。

学生に適切な助言をするには、まず彼等の授業選択行動を理解する必要がある。しかし学生が何を基準に授業を選択しているのかは、もっぱら経験則により理解されてきたものの、定量的にはほとんど明らかにされてこなかった。授業選択基準を量的に述べた研究が過去に無かったわけではなく、上田(1997)の調査の中でも触れられてはいる。しかしそれは進路意識に関する調査の中の単なる一項目であり授業に対する満足度との関連は考慮されていなかった。また、彼女の調査対象は2, 3年生であったが、一般的に、教養教育科目のような自由な選択を行う機会が多いのは1年生である。どちらにせよ、その研究は十数年過去のものであり現在における新たな

選択基準を明らかにする必要がある。

そこで本研究では始めに、教養教育科目の選択時に重要視されそうな判断基準を調べ、それらが重要視される度合いを一对比較法により定量化する。さらに、それらの重視度と、授業への満足度との関連を明らかにする。もしも満足度の低い学生の傾向を指摘し改善できれば、より多くの学生に満足度の高い学習環境を提供することが可能となる。本研究は、授業評価アンケートのような授業実施後の授業改善策とは異なり、授業受講前の時点で学生の満足度を改善できる点で有意義と考えられる。

方法

本研究では、学生が授業選択時に気にかけるであろう選択基準を7つ挙げ、それらを一对比較法によって間隔尺度化した。その選択基準とは、「興味を持っている分野であること」「役に立つ内容であること」「教科書代がかからないこと」「空き時間を埋められること」「教員が良いこと」「単位が取りやすいこと」「授業中がラクであること」の7つであった。さらにこれらの選択基準を重視する度合い（重視度）と満足度との関連を検討した。

回答者

回答者は、大阪大学の教養教育科目「心理学研究方法論」を受講する学生140名（男性78名、女性62名）であった。また、学年の内訳は、1年生136名、2年生3名、4年生1名であった。ただし本研究の焦点は1年生の選択行動であるため、1年生以外の回答は以下の分析には含めなかった。なお当該授業の登録受講者数は151名であった。

質問項目の選定

質問紙で使用する7つの選択基準は、あらかじめ下記の手順で選定された。まず、授業選択の基準とする項目を自由記述で収集した。自由記述は「心理学研究方法論」の開講初日（2009年4月8日）にその授業の受講者（男性81名、女性66名）に対して行われた。したがって自由記述の回答者と、一对比較の質問紙の回答者はほとんど重複する集団であった。質問内容は、「あなたがこの授業をとった理由・決め手は何ですか」で、回答は出席カード（B5紙）の余白を利用して行われた。その後、回収された自由記述をもとに、著者と高等教育の専門家（教育学博士）1名とで、重複を排除するなどの協議をして前述の7項目に選定した。

質問紙

データの取得は、質問紙によっておこなわれた（資料参照）。質問紙は両面印刷されたA4紙1枚であった。質問紙のおもて面の冒頭には、教示文と回答方法が書かれていた。教示文は「下には、授業選択時に学生が基準にするであろう要因が対になって提示されています。それらのうち、あなたが授業選択の際に、より重要視する方を答えてください。想定する授業は、必修授業などではなく、『教養教育科目』としてください。この調査はデータ全体を統計的にあつかうものであり、個人を問題にするものではありません」であった。教示と回答方法の次に、比較される項目が1行につき2つ（1対）ずつ左右に配置されていた。7つの項目から2つずつ重複なく選び、組み合わせは21組であった。従って、一对比較の設問は全部で21問であった。ただし、順序効果を相殺するために、設問順序が異なる同様の質問紙が4パターン作成された。21の設問の順序はランダム化されていた。また、それぞれの項目が右に提示されているか左に提示されるかは均等になるよう、質問紙4パターンの間で計画的に配置された。質問紙のうら面は、フェイスシートであった。フェイスシートでは、回答者の学部、年齢、性別、教養教育科目全般に対する満足度が尋ねられた。教養教育科目への満足度の回答方法は、visual analog scale（VAS）であった。VASの左端は「これ以下が無いくらい不満足である」、右端は「これ以上が無いくらい満足である」であった。VASの長さは紙面上で100mmであった。

手続き

調査は「心理学研究方法論」の授業中に、授業担当教員によっておこなわれた。その授業担当教員は著者のうちの一名であった。調査場所は一般的な大学の講義室であった。実施日時は、2009年6月19日の4限目（15時頃）であった。はじめに、調査者が質問紙を配布し、教示文を音読した。質問のある者には適宜回答し、質問がなくなった時点で全員一斉に回答を開始した。なお、おもて面（教示文のある面）から先に回答するように口頭で教示が与えられた。全員の回答完了が確認された後、質問紙は回収された。

結果と考察

全体的な傾向

はじめに、7つの選択基準の重視度を間隔尺度化した。

間隔尺度化は、Thurstone (1927) のケースVで行った。そのためにまず、それぞれの項目が他の項目と比較された時に「より重視する」と判断された度数から、被選択率を算出した。次にその被選択率から z 得点を計算し、重視度とした。また、パーセンタイル法により95%信頼区間 (95% CI) を算出した (回答者から136人をランダムに復元抽出して上記同様に z 得点を計算することを1000回繰り返し、その2.5パーセンタイルを下限、97.5パーセンタイルを上限とした)。

その結果、「興味を持っている分野であること」は

0.86, 95% CI [0.73, 0.99], 「役に立つ内容であること」は0.24 [0.12, 0.35], 「教科書代がかからないこと」は-0.86 [-0.99, -0.74], 「空き時間を埋められること」は-0.77 [-0.92, -0.62], 「教員が良いこと」は-0.06 [-0.18, 0.05], 「単位が取りやすいこと」は0.62 [0.49, 0.76], 「授業中がラクであること」は-0.03 [-0.13, 0.07] であった (図1)。これらの数値は相対的な距離のみが意味を持ち、原点は任意である。それゆえ負記号は逆の「軽視」を意味するとは限らない。

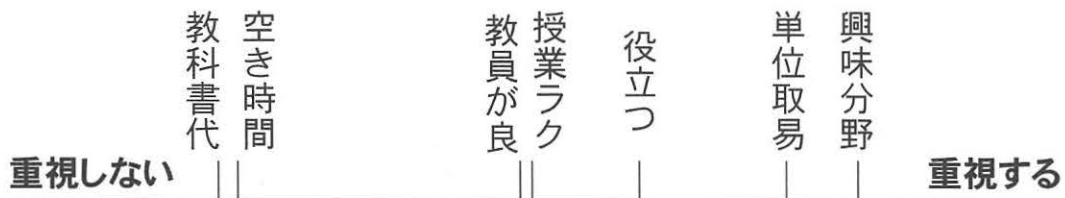


図1 各項目に対する重視度。それぞれの重視度が相対的な距離として表示されている。

これらの結果から、学生は自分の興味と授業内容が一致することをもっとも重視して授業を選択していると思われる。興味が優先されることは上田 (1997) の結果でも示されており、大学生にとって比較的普遍的な態度であると考えられる。授業の内容が役に立つかどうかという判断基準も確かに重要視されているが、興味ほどは重要視されていない。つまり、授業の実利的な側面よりも知的好奇心を重視していると解釈でき、これは教養教育の目的に合致している。しかしながら、授業内容が役に立つかどうかよりも、単位のとりやすさが重要視されている。そういった意味では、学生は必ずしも自己研鑽だけを主として授業を選んでいるわけではなく、やはり卒業や成績のために授業を「こなしている」という側面も比較的強いと言える。

「教員が良いこと」の重視度は中程度であり、学生は良い教員をさほど求めていないようにも見える。しかしながらその解釈は必ずしも正しくない。第一に、ほとんどの場合教員の善し悪しは受講してゆく中でわかってくるからである。つまり、授業の選択時には、担当教員についての情報があまり無く、判断材料になりにくかっただけという可能性がある。特に2009年度の大阪大学の履修登録システムでは、開講時にはすでに履修登録済みの状態になっている。第二に、本研究で採用された7項目はすべて、もともと重視しているものが選出されているからである。つまりこの「中程度」は、あくまで「重視

する物の中で中程度」なのである。これらの理由から、学生は良い教員を求めながらも、履修選択時の判断基準にはなり得なかったという可能性が考えられる。

空き時間を埋められるかどうかは、他の要因に比べるとさほど重視されていない。一見すると意外ようだが、これは他の結果から必然的に導かれる。興味のある授業や、単位の取りやすそうな授業を優先的にとってゆき、それらの隙間にできるのがいわゆる空き時間だからである。時間帯の都合は、上田 (1997) では上位の重視度と示されており、本研究の結果とは一致しない。これは両研究における回答方法の違いが反映された結果であろう。上田 (1997) では複数回答可能な多肢選択法であったが、本研究では一対比較を用いた。一対比較法は、複数回答を許さない方式である。つまり、時間割の都合は、選択基準としての重視度こそ低いが、ほかの基準と並行して常に意識される (複数回答時に選ばれる) と考えられる。時間の都合は重要ではあるが、外的に決定しているものであり、選択時の基準としては使われないであろう。

選択の基準と満足度の関係

ここでは、選択の基準 (要因) と満足度との関係を調べた。はじめに、教養教育科目に対する満足度のVASを1 mm単位で計測し、0 から100点に換算した。その結果、全回答者の平均満足度得点は46.94 ($SD = 21.85$) 点であ

った。ただし満足度の分布は正規分布ではなく、中央を境に二峰性になっていた（図2）。

個人ごとの重視度を得るために、各選択要因が回答者内で選択された度数（頻度）を求めた。つまり、21問中何回選択されたかであった（ひとつの要因がほかの要因と比較される回数は6回（7-1）であるため、最高は6、最低は0であった）。この度数は被選択率に換算すると0や1を含む場合があったため、z得点に換算はしなかった。

次に各選択要因の度数と満足度との相関を算出した（表1）。その結果、「興味を持っている分野であること」

と満足度との間に正の相関が見られた（ $r = .20, n = 136, p = .02$ ）。また、「興味を持っている分野であること」は、「単位が取りやすいこと」（ $r = -.61, n = 136, p < .001$ ）や「授業中がラクであること」（ $r = -.50, n = 136, p < .001$ ）との間にも負の相関が見られた。

これらの結果から、教養教育科目に対してより満足している学生は、各自の興味に基づき授業を選択している度合いが強いと言える。逆に言えば、自分の興味に沿わない授業を選択している学生は授業への満足度がより低い。そのような学生は相対的に、単位の取りやすさや、授業中の楽さを重視する割合が高いのである。

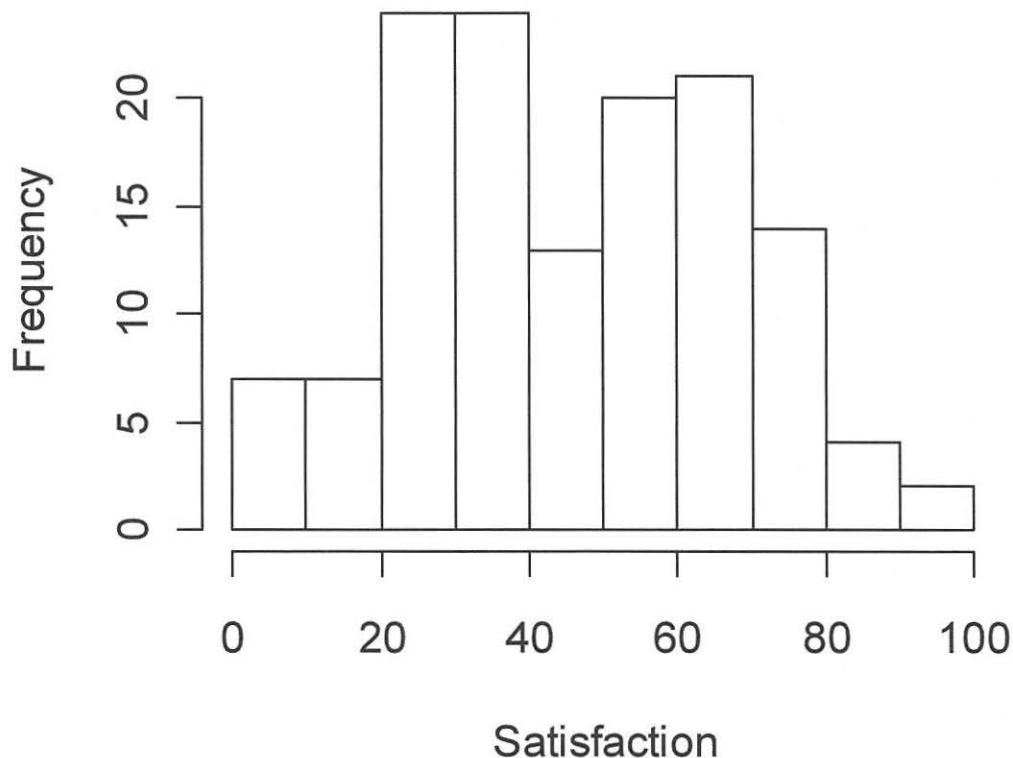


図2 教養教育科目の満足度に関する人数分布。横軸が満足度（0-100）、縦軸が人数である。

表1 各選択基準および満足度に見られる相関行列（ $N = 136$ ）

	興味分野	役に立つ	教科書代	空き時間	教員が良	単位取易	授業ラク
興味分野	-						
役に立つ	.38**	-					
教科書代	-.16	-.18*	-				
空き時間	-.03	-.08	-.23**	-			
教員が良	-.02	-.14	-.18*	-.29**	-		
単位取易	-.61**	-.56**	-.05	-.21*	-.13	-	
授業ラク	-.50**	-.41**	.00	-.24**	-.31**	.47**	-
満足度	.20*	.03	.01	-.05	.09	-.15	-.10

* $p < .05$. ** $p < .01$.

もちろん、この結果は満足度と授業選択要因との相関関係を示しているが、因果関係について確定的なことは言えない。つまり、単位や時間割の都合を優先して授業を選択してしまった結果として不満足な授業を履修する羽目になったのか、それとも、元々教養教育科目に不満足であった学生が仕方なく履修するために単位や時間割の都合を優先したのかを確定することはできない。しかしながら、分析対象者すべてが1年生の1学期、つまり初めての教養教育科目の受講であることを考えると、元々不満足であったと考えることは妥当でない。したがって、単位や時間割の都合を優先した結果、不満足な授業を履修することになったと考えるほうがつじつまが合う。

学生の満足度を高める授業の選択指導

授業への興味が満足度に影響するという事実は、授業評価アンケートをもとにした調査（伊藤，2008）とも一致している。それだけに、授業内容への興味と満足度とは強く関連しているといえる。授業評価アンケートで授業への満足度を測る場合は、それを授業改善に役立てるという目的がある。その場合、ともすると教授法や教材などテクニカルな部分に注意を向けがちかも知れないが、授業内容自体を再考することも重要なのである。授業評価アンケートを共分散構造分析した星野・牟田（2005）では、「コミュニケーション」²¹が満足度に与える総合効果は.26としている。それを考えれば、本研究が明らかにした、興味の重視度と満足度との相関は決して小さいものではない。もちろん彼らの研究と本研究とは扱う変数も異なり直接の比較はできないが、授業内容への興味が、学生とのインタラクションや教授法にとらず重要なのは確かといえそうである。

授業の満足度に影響を及ぼす重要な分岐点が、授業受講前にも存在し得るという重要な事実を、本研究は示している。この知見を生かすために、学生、とくに新入生には、各自の興味を重視して授業を選択するよう指導すべきである。本研究の対象集団は大阪大学で特定の授業を受講している学生に限られていたが、授業における興味の重要性は伊藤（2008）や上田（1997）にも示されて

おり、この指導は広く大学生に適用されうると考えられる。ただしこれによって満足度をあげることはそれほど簡単なことではない可能性もある。本研究で示したとおり、学生たちは元々、ある程度は各自の興味を重要視しているからである。つまり指導するなら、「より重要視するように」指導しなければならず、これを学生に実感させるためには何らかの方法を考える必要がある。したがって大学教員は、より興味を持てる授業内容自体も考えつつ、興味の重要性を学生に実感させる方法を考案する必要がある。

脚注

- 1) ここで言う教養教育とは、教養をつけることを直接の目的とした科目群で、たとえば大阪大学の場合は全学共通科目、特にその中の教養教育科目群がそれに当たる。
- 2) そこで扱われている「コミュニケーション」とは「小テストや課題を適宜取り入れていた」や「学生に発言させるように努力していた」「課題の返却・事後指導が適切に行われていた」という質問項目をまとめたものであり、インタラクションとも言い換えることができそうである。

参考文献

- Gnoth, J. & Juric, B. (1996). Students' motivation to study introductory marketing. *Educational Psychology*, 16 (4), 389-405.
- 星野敦子・牟田博光 (2006). 大学の授業における諸要因の相互作用と授業満足度の因果関係. 日本教育工学会論文誌, 29 (4), 463-473.
- 伊藤征一 (2008). 授業に対する学生の満足度の構造. 星城大学経営学部研究紀要, 5, 97-108.
- 文部科学省中央教育審議会 (2008, December 24). 学士課程教育の構築に向けて (答申). Retrieved November 8, 2009, from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_ics_files/afildfile/2008/12/26/1217067_001.pdf
- Thurstone, L.L. (1927). A law of comparative judgement. *Psychological Review*, 34, 273-286.
- 上田恵津子 (1997). 進路意識の観点から大学教育を考えるための基礎研究. 京都大学高等教育叢書, 2, 88-111.

(まつした そよぐ 大学教育実践センター・助教)
(あかい せいき 大学教育実践センター・教授)

教養教育科目の選択要因に関する調査

下には、授業選択時に学生が基準にするであろう要因が対になって提示されています。

それらのうち、あなたが授業選択の際に、より重要視する方を答えてください。

想定する授業は、必修授業などではなく、「教養教育科目」としてください。

この調査はデータ全体を統計的にあつかうものであり、個人を問題にするものではありません。

回答方法

重要視する項目の□をチェックしてください。

他の質問との整合性はとくに気にする必要はありません。

漏れの無いように、すべての項目に回答してください。

(例	豊中キャンパスであること	☒	☐ ノートが不要なこと	)
1	教員が良いこと	☐	☐ 興味を持っている分野であること	
2	教員が良いこと	☐	☐ 役に立つ内容であること	
3	授業中がラクであること	☐	☐ 役に立つ内容であること	
4	役に立つ内容であること	☐	☐ 興味を持っている分野であること	
5	授業中がラクであること	☐	☐ 教員が良いこと	
6	教科書代がかからないこと	☐	☐ 役に立つ内容であること	
7	授業中がラクであること	☐	☐ 興味を持っている分野であること	
8	空き時間を埋められること	☐	☐ 教科書代がかからないこと	
9	単位が取りやすいこと	☐	☐ 教員が良いこと	
10	単位が取りやすいこと	☐	☐ 興味を持っている分野であること	
11	単位が取りやすいこと	☐	☐ 教科書代がかからないこと	
12	空き時間を埋められること	☐	☐ 単位が取りやすいこと	
13	空き時間を埋められること	☐	☐ 授業中がラクであること	
14	役に立つ内容であること	☐	☐ 空き時間を埋められること	
15	興味を持っている分野であること	☐	☐ 空き時間を埋められること	
16	空き時間を埋められること	☐	☐ 教員が良いこと	
17	興味を持っている分野であること	☐	☐ 教科書代がかからないこと	
18	教科書代がかからないこと	☐	☐ 教員が良いこと	
19	単位が取りやすいこと	☐	☐ 授業中がラクであること	
20	教科書代がかからないこと	☐	☐ 授業中がラクであること	
21	役に立つ内容であること	☐	☐ 単位が取りやすいこと	

このページは21問です。裏面もお答えください。

あなた自身に関する、以下の質問にお答えください。

1. あなたは何学部ですか？○で囲んでください。

文学部 人間科学部 外国語学部 法学部 経済学部
理学部 医学部 歯学部 薬学部 工学部 基礎工学部

2. あなたは学年を数字で答えてください。

_____年生

3. あなたの性別を○で囲ってください。

男 女

4. あなたは、教養教育科目全般に対してどれくらい満足していますか？

下の線の、左端を「これ以下が無いくらい不満足である」、右端を「これ以上が無いくらい満足である。」とした場合、あなたの満足度に当てはまる箇所を縦線で区切ってください。

これ以下が無いくらい不満足

これ以上が無いくらい満足

5. その他、なにか感想などがあれば書いてください。

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。